ワークショップ

てづくりのスツールでおしゃべりしよう

報告書

1．実施概要

開催日時：9 月 23 日（金・祝）12:30～17:30
参 加 者：30 名
対　　象：こどもとおとなのペア（こどもは小学 1 年生～中学 3 年生）
場　　所：東京都現代美術館　地下 2 階講堂
参 加 費：2000 円

2．講師プロフィール

2m26（メラニー・エレスバク、セバスチャン・ルノー）

建築家でありアーティストのふたりが 2015 年に設立し、京都を拠点に活動。ル・コルビュジエが提唱したモデュロールを基準寸法とした家具デザインと建築設計を手がける（「2m26cm」というユニット名はモデュロールのひとつ「人が手を上げた時の高さ」に由来）。また、デザインにとどまらず、パフォーマンス、ワークショップなど多彩なアプローチ方法によって、都市のあり方を探求している。家具をツールにコミュニケーションを創出することへの関心から、シンプルな工程の家具づくりワークショップを各地で開催している。近年の主な作品に、「SAIKODAYO」（静岡、2017 年）、「オルタナティヴ・スペース・コア」（広島、2017 年）、「2m26 Kyoto House」（京都、2020 年）など。主なパフォーマンスに「TOKYO CROSSING」（東京、2015 年）などがある。

3．材料

・ホワイトボード
・インパクトドライバー
・木工用ビス(45mm、65mm)
・ドリルビット
・30cm 定規
・鉛筆
・軍手
・スツール持ち帰り用の持ち手と紐

4．プログラムの内容と流れ

1．はじめに

開催中の展覧会「ジャン・プルーヴェ展　椅子から建築まで」の関連プログラムとして行われた今回のワークショップ。展覧会でプルーヴェが手がけた椅子が多数紹介されていることから、木のスツール（小さな椅子）を実際につくってみることにしました。

講師はフランスの建築家・アーティストユニット「2m26」。英語を話す参加者もいたため、二か国語（日本語・英語、逐次通訳あり）で実施したことも、ワークショップの特色のひとつです。

2. レクチャー（20 分）

はじめに 2m26 のふたりのレクチャーを行いました。2m26 はジャン・プルーヴェと同じフランスのナンシー出身。ナンシーは 20 世紀初頭にアール・ヌーヴォーが栄えた都市です。幼少期にはプルーヴェがデザインした家具を使っていたこともあり、大きな影響を受けたと言います。

2m26 は大学で 6 年間建築の勉強をしました。大学 2 年生のときから建築を設計するだけでなく、自分の手で実際に建物をつくりはじめたそうです。日本の工芸への興味も相まって、来日。日本各地を訪れたのち、現在は豊かな自然に囲まれた京都市西部を拠点に活動しています。来日してから手がけた展覧会の会場構成のお仕事や建築、家具を紹介していただきました。

3. 制作（120 分）

いよいよスツールづくりをはじめます。今回のスツールに用いた木材は、2m26 が拠点とする京都市西部産で、原木を製材したあとの端材も利用しています。工程は３つ。①パーツ（2m26 が事前にカット）の決められた位置に鉛筆で印をつける。②電動ドライバーを使用して印の位置に穴をあける。③パーツを組み立てて、木工用ビスで固定する。本格的な家具づくりは参加者のほとんどが初めてだったので、図面を参照してパーツに印をつけることだけでも容易ではありません。電動ドライバーを使用した穴あけの作業では、おとながこどもの手元をサポートしながら、慎重に進めていきました。

4. 展覧会の鑑賞（20 分）

スツールの完成後、ジャン・プルーヴェ展の「第３章　椅子」をこどもとおとなのペアで自由に鑑賞。鑑賞前に、参加者には「展示されている椅子のうち一脚だけ家に持ち帰ることができるなら、どれを選びますか？　選んだ理由は？」という質問を投げかけていました。そのため参加者は椅子のパーツ（脚・座・背）をそれぞれじっくりと見ていくだけではなく、実際に座ったときの座り心地や椅子を使用する場面を想像しながら鑑賞しました。

5. 発表・対話（60 分）

展示室から講堂に戻り、それぞれのスツールに座った参加者は、選んだ椅子について発表しました。
参加者からは、「この椅子に腰をかけて星を眺めてみたい（「ヴィジター・カングル」アームチェア２人掛け型）」、「リビングに置いたら、椅子と木の組み合わせが合うと思った（「メトロポール」チェア No.305）」、「（椅子の）脚がスタイリッシュでおしゃれ（「コンフェランス」チェア）」、「みどりが好きだから（「メトロポール」チェア No.305　アルミニウム製座面・背板タイプ）」、「学校の椅子と似ているから、勉強が捗ると思った（「メトロポール」チェア No.305）」などの意見が出ました。

その後、スツールづくりの感想、プルーヴェの作品に関すること、講師の 2m26 への質問など、途切れることなく対話が続きました。

5. まとめ

今回「ジャン・プルーヴェ展　椅子から建築まで」展の関連プログラムとして、ワークショップ「てづくりのスツールでおしゃべりしよう」を開催しました。
日常生活のなかには、「寝る」「立つ」「歩く(走る)」など、わたしたちは自らの身体を無意識的に（あるいはなにかの道具によって規定されながら）動かし、姿勢を変化させ、さまざまな行動をおこなっています。「座る」という行為は、身体の重心を落とし、膝を曲げて、道具に体重の一部を預けることでうまれる行動で、椅子やスツールといった道具は、人間の体重を受け止める働きを持っています。
椅子という普段、当たり前に用いられているこの道具に、プルーヴェは素材のもつ性質を生かしながら機能的で使いやすく、美しい造形を追い求め続けました。
2m26 がデザインしたスツールも、シンプルな造形で簡単そうに見えるのですが、同じようなパーツの組み合わせにより、どのパーツがどこにあるべきなのか、すでに切ってあるパーツに計測、穴あけ、組み立てるという 3 つの手順でさえ、おとなたちの間にもたくさんの混乱が生じました。
その中で少数ではありますが、別々のパーツをどのように組み合わせればいいのか、状況をすんなりと受け入れるこどもがいたことが印象的でした。定規のメモリは読めないこどもでも、サンプルの椅子を見ながら「ちがうよ、ママ（このパーツの位置は）ここだよ」と、こどもが椅子の構造を読み解き、おとなに「違う」ということを指摘する。このワークショップでは、こどももおとなもいっしょになって考えて、ひとつひとつのパーツを手で触り、身体を使って接合部を押さえ、穴あけや接合の作業をおこない、声をかけ協力しあっていました。講師とのコミュニケーションは英語だったため、言語や年齢の差を超えて、ものづくりをおこなうことによって生まれていく一体感と、それぞれが真剣にひとつひとつの作業を積み重ね、完成したときの達成感がワークショップ会場を満たしていきました。

（東京都現代美術館　学芸員　坂井若葉）

参加者の感想（原文ママ・抜粋）

・ワークショップに参加した方たちといす（展覧会）について話すことが出来て良かった上、楽しかったです。自分の手を使ってものを作る楽しさを経験することができて良かったです。
・たのしかった　またこのわーくしょっぷをしたいです　このいすをだいじにします。
・いすを作るのがむずかしかったけれど楽しかったです。
・建築家の方と直接お話しし、交流する機会はとても貴重で、親子でとても楽しい時間となりました。デザイナーさんの椅子がいかに計算され、工夫され、設計されているのかを知ることができ、非常に勉強になりました。
・これからたいせつに、みんなでつかう。
・思っていたよりむずかしくて、おどろきました。家では自分用として使おうと思います。またきかいがあればやりたいです…!
・今回、普段使っている椅子についてを深く考える機会がなく、ただデザインのみを見て座っていましたが、実際に作ってみてバランスや、作ることのむずかしさを学び楽しかったです。みなさんの意見や展示品を観に行ったり。大変内容の充実したワークショップでした。ありがとうございました。